

講義年月日	2004年1月14日 (水)
講演者	加藤 好郎氏 (慶應義塾大学三田メディアセンター事務長)
テーマ	グローバルリソースシェアリング時代の到来 :GIFを中心に
講義内容	<p>1.はじめに リソースシェアリングの必要性について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・(大学図書館をどまぐ状況) 国立大学の法人化、私立大学の経営危機、洋雑誌の高騰、出版社の寡占化。 ・(大学図書館が対応を迫られていること) 学術情報基盤整備、学術情報の流通と確保、利用者サービスの拡大、効率性の向上、図書館コスト削減。 <p>2.学術情報収集の実態 日本の大学の研究者24万人について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間1人平均使用量は、図書89冊(洋書25%)、雑誌論文264件(洋雑誌40%)である。 ・雑誌論文年間需要6300万件の中で、大学図書館での入手は1500万件(全体の25%)である。 <p>3.ILL/DD業務の改善 米国におけるリソースシェアリングの動向は、収書方針の変更に表れている。</p> <p>「どあえず購入 必要な時に購入」</p> <p>米国では、相互貸借業務は費用対効果を踏まえ、概念そのものの見直しが行われている。</p> <p>「互恵」という概念から迅速なサービス提供へ」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「情報アクセスの未来にむけた第一歩」がメアリー・ジャクソンを中心に1992年にまとめられた。 <ol style="list-style-type: none"> 1.利用者による直接申し込み 2.利用度の低い(レア)資料の分担収集 3.コンソーシアムへの参加 ・OhioLINK等では利用者による所蔵館への直接申し込みと受け取りが実現している。 ・ILLの成功の3条件は、1.経費削減 2.所要時間短縮 3.借手の充足率である。 <p>4.Global ILL Framework GIFは大学図書館がグローバルなILL/DDを実現するための仕組みである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ILLシステムを提供している書誌ユーティリティ同士が国際標準であるISOプロトコルによりILLシステム間リンクを実現する。 ・OCLCとのシステム間リンクは2001年12月に完成した。 ・KERIS(韓国)等とのシステム間リンクを今後、拡大していく。 ・NACIS-ILLユーザは、国内の他大学図書館に依頼するのと同じように北米その他のGIF参加館に対して文献複写の依頼ができる。 ・料金決済のための第三者機関が支払い等の処理を行うシステムが実現された。 <p>GIF参加状況と利用状況は、(日本側)国立42、公立2、私立22、協同機関3 (米国側)31校。</p> <p>5.まとめ 学術情報の収集と発信の方法において重要なこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グローバルリソースシェアリング ・コンソーシアムの構築 <p>これからは資源共有型ネットワークと相互協力型ネットワークの混合型になる。</p> <p>独立した組織と管理、財源、有能なライブラリアンがコンソーシアムの成立条件には欠かせない。</p> <p>SPARC/JAPANの誕生</p> <p>40機関50誌応募があり、21誌採択、16誌検討中。今後の拡大が予想される。</p>
感想	GIFは利用者への迅速な情報提供につながるので非常に興味を覚えた。また、コンソーシアムを構築することは学術情報の幅広い収集と利用者への提供を目指すために極めて有効であると感じた。
配付物	「グローバルリソースシェアリング時代の到来 :GIFを中心に」